



研究論文 (Articles)

高等学校における学校教育目標の内容分析¹⁾

—多様化と質保証はどのように展開しているのか—

神 崎 真 実

(立命館大学大学院文学研究科)

Content Analysis of Educational Goals of High School in Japan:
How Are the Diversity and Quality Assurance Developed in Each Schools?

KANZAKI Mami

(Graduate School of Letters, Ritsumeikan University)

This study aimed to deductively classify high schools into practical patterns, to inductively analyze the characteristics of each type school goals, and to consider how the diversity and quality assurance are developed in high school. First, we set three criteria to classify high schools, which basically affect the way of each school's practices: 1) public or private, 2) curriculum, and 3) competitiveness at entrance examination. Second, we collected the data about school goals from 362 high schools and correspondence-analysis was conducted. As a result, there were four types in school goals: (a) to develop academic ability for globalization, (b) to raise the numbers of the students who go on to university and to cultivate human nature, (c) to enhance educational activities for promoting both the bond with local community and the students' self-supports, and (d) to support the students' school lives for completing high school diplomas. Each goals corresponded to (a) public-fulltime-competitive-school, (b) private-fulltime-school, (c) public-fulltime-non-competitive-school, and (d) part-time-school. Based on these results, we discussed about the diversity and quality assurance of high school.

日本では、高等学校（以下、高校）に対して教育の多様化と質保証という2つの社会的要請がなされている。本研究は、複数の高校を対象として学校教育目標の内容分析を行うことで、高校が社会的要請に対してどのように応えようとしているのかを検討した。設置者、課程、偏差値の3変数で高校を類型化し、362校分を対象として高校タイプと校長挨拶文の対応分析を行った。結果、①国際人育成へ向けた学力向上、②大学進学と人間性育成、③地域共生と生徒の自立へ向けた教育活動の充実、④個性尊重と卒業へ向けた生活のサポートという4つのクラスターが得られ、それぞれに公立上位、私立全般、公立中下位、公私通信の学校が該当した。4つのクラスターそれぞれの背景について考察し、2つの社会的要請が高校タイプ間で分業されている可能性を指摘した。

Key Words : Educational goal, Governments' policy, High school, Text mining, Content analysis

キーワード : 学校教育目標, 社会的要請, 高校教育, テキストマイニング, 内容分析

1) 本研究は、日本学校心理学会第18回大会、日本通信教育学会研究交流集会における発表をもとに、再分析を行い大幅に修正したものである。また、日本学術振興会、研究員奨励費（課題番号:15J07984）の助成を受けている。

問題と目的

1. 高校教育をめぐる政策と展開：教育目標の帰納的理解の必要性

高等学校（以下、高校）教育の特色化・個性化・多様化がすすめられるようになって約30年が経過した。それまで日本の高校教育は、進学希望者を受け入れるため学校数の量的拡大を図り、高校進学率は右肩あがりて上昇した。ところが、高校教育の量的拡大とともに偏差値による輪切り教育と一斉指導が定着し、校内暴力や生徒の「荒れ」が頻発した。そこで、政府は改革の視点を量的拡充から質的充実へ、偏差値重視から個性・人間性重視へと転換し、1980年代半ば以降、新しいタイプの高校を推進した。とりわけ、1991年に中央教育審議会・答申「新しい時代に対応する教育改革」が提出されて以降、教育の特色化が本格実施された。この答申では、これまでの「教育方法はややもすると画一的一斉方式に傾き、個々の生徒や学生のそこからはみ出た個性的生き方に対するきめの細かな、コストを掛けた教育方法の開発と実施には、今一つ配慮が払われなかった。これからは、全員が同じ教育内容を受けるような形式的な平等ではなく、個性に応じてそれぞれ異なるものを目指す実質的な平等を実現していくことがますます重要になる」（中央教育審議会、1991）として、生徒の個性に応じた教育の必要性が訴えられた。こうして、規定の単位修得によって卒業を認める単位制、選択科目を質・量ともに幅広く用意する総合学科といった教育の個性化をすすめる仕組みが整備され、高校に対して生徒の多様なニーズに応じる課題が付与されていった。

一方で、2000年代以降、学校教育の成果が「数値で示される学力に還元されて捉えられる」動きが生じ（志水、2012, p.6）、学力をめぐる質保証が要請されるようになった。この背景には、PISAショックや大学生の学力低下等をきっかけとした学力低下論争が横たわっていた（戸田、2009）²⁾。こうした学

力低下問題に対しては、ゆとり路線の見直し、学習指導要領の改訂といった対策が講じられると同時に、学校評価制の導入によって学校単位で改善していくことが求められた。2007年の学校教育法改正以降、学校の自己評価と設置者への報告が義務づけられ、個々の学校では目標設定と取組み評価による学校改善が図られている。つまり、高校教育は、生徒の個性に応じた教育の個性化・多様化を図ると同時に、評価によって絶えず学校運営を改善し学力を保障していく責任を果たさなければならない状況下に置かれているのである。

では、教育の多様化と質保証という2つの社会的要請に対して、高校はどのように応じようとしているのか。これまで、教育の多様化と質保証それぞれの政策に関する研究や、個別の事例を追った研究は行われてきたものの（例えば、樋田・荻谷・堀・大多和、2014：大多和、2014）、複数の高校を対象として、高校側の意図を分析した論文は管見の限り見当たらない。坂野（2009, p.73）は、多様化と質保証が同時に追求されている高校教育について、「この最適解を求めるためには、一元的な政策分析では限界」があるとし、「高校教育の目的・目標、その目的等を達成するための行程表、成果の検証が求められ」とした。

そこで本研究では、各高校で構想される学校教育目標に着目する。学校教育目標とは、「社会的次元での教育目的、教育目標を各学校の条件のなかで創造的に展開するための実践教育目標」である（小島、1985, p.151）。各高校は、社会的次元での目標³⁾を、自校の状況に鑑みて、教育の個性化も考慮しつつ展開していかなければならない。碓井(2004)によれば、学校教育目標の設定に際しては、①在籍生徒の実態に即し、到達できるものであること、②地域や保護者からの期待や願いが反映されていること、③学校の教職員の合意があり具体化できること、④学校施

2) 日本国内における学力低下論争のみならず、世界的な教育改革の潮流として、教授・学習の標準化や中心教科への焦点化等を進める動きがあったことが影響して、学校評価が導入されたという説もある（松下、2012）。

3) これまで、産業構造の変化や知識基盤社会に対応すべく、文部科学省から「生きる力」、心理学者から「自己学習力」（市川、1995：波多野、1980）、経済協力開発機構（OECD）から「キー・コンピテンシー」、国立教育政策研究所教育課程研究センターから「21世紀型能力」といった新たな学力観を示す概念が提示されてきた。こうした社会的次元での目標は、教育の多様化よりも、質保証に対する社会的要請と関連している。

設の物的条件に合うことの4条件が考慮されるべきだという。学校教育目標は、社会的要請と学校の実態・状況をふまえて設定されるものであり、学校が社会的要請にどのように応えようとしているのかを見る指標になる。

2. 校長挨拶文への着目と高校の類型化：偏差値、設置者、課程からみる学校教育目標

学校教育目標を知る材料として、本研究では各高校ホームページ（以下 HP）に掲載された校長の挨拶文を用いる。学校教育目標は、社会的要請と学校の実態をふまえて設定されるものである。しかし、公的に示される学校教育目標は、1～3程度の言葉や文章でまとめられるため、学校がどのような社会的要請を意識しているのか、その意図が読み取りにくい。例えば杉並区立和田中学校の民間人校長を務めた代田（2014）は、①理不尽なことの多い社会の現実や、勤労意欲に満ち溢れた世界の人々とライバルになる未来を、学校では教えてこなかったことを問題視し、②これからの社会では意見の違う相手とも合意形成をはかることのできる人材が必要と考えて、学校教育目標を設定した。そのときの学校教育目標は、教職員と共有するため「自立貢献」というシンプルな言葉でまとめられた。このように、学校教育目標は社会的要請等をふまえて設定されるものであるが、公開されるのは、短文もしくはいくつかの概念である。その点、校長挨拶文は、学校教育目標だけでなく、現代社会の捉え方と教育方針が記載されており、学校の意図を読み取りやすい。

校長挨拶文を分析するにあたって、本研究では学校教育目標を方向づけると考えられる3つの形態に焦点をあてて高校を類型化する。第一に、全日制・定時制・通信制という課程区分である。定時制は全日制高校に進めない者、通信制は全日制・定時制高校に進めない者へ学習機会を提供することを創設の趣旨としており（文部科学省、2016a）、入学者のニーズが異なることが予想される。第二に、設置者による区分（公立・私立）である。設置者によって、学校に関わる経費負担も、教育委員会による管理も、そして教職員の異動のあり方も異なる。第三に、高校入試における各高校の偏差値である。偏差値は入

試の難易度を示すための指標にすぎないが、入試偏差値によって卒業に至る者の割合が異なると言われており（酒井・林、2012）、学校教育目標にも影響を及ぼしていると考えられる。

教育目標を方向づける形態としては、上述した3つ以外にも地域性や学科、教員数と生徒数の比率など様々な要因が考えられる。高校教育を多角的に理解するには、そうした多数の要因に着目していく必要がある。しかし、教育目標の研究が蓄積されていない現状にあって、まず包括的に高校教育を捉えるために、ここでは3つの形態に絞って高校を類型化する（以下では、類型化したものを「高校タイプ」と呼ぶ）。

以上をふまえて本研究では、課程、設置者、偏差値で高校を類型化し、高校タイプごとの学校教育目標の特徴を帰納的に把握することを目的とする。その上で、学校教育目標のまとめごと背景を整理し、多様化と質保証という2つの社会的要請に対する高校での展開について考察する。

方法

テキストマイニングを採用した。テキストマイニングとは、テキストを形態素に分解することで定量的な分析を行い、分析結果を視覚的に表現する手法である（藤井、2005）。

1. データ収集

(1) 高校の類型と対象校

本研究が着目した3つの形態で高校を類型化すると、課程3（全日制、定時制、通信制）×設置者2（公立、私立）×偏差値3（上位、中位、下位）、合計18の高校タイプが導出される。しかしながら実際には、①定時制の大半が全日制と併設されており、定時制課程に特化した挨拶文が極端に少なかったことから、定時制は調査対象から除外せざるを得ず、②通信制は、入学時点で学力テストを行わない学校も多く偏差値による区分ができなかった。したがって実際の類型は、通信制における設置者2（公立、私立）と、全日制（定時制も含まれる）における設置者2（公立、私立）×偏差値3（上位、中位、下位）の6、

合計8つの高校タイプに限定された(表1を参照)。

校長挨拶文は、校長の名が記載され、なおかつ教育目標を示す前後の文脈(学校概要や今後の展望等)が記載されていることを条件とした。全日制については、エリアを京都府と大阪府内に限定し、上述した条件を満たす挨拶文を掲載した学校を対象とした。両府は公私ともに学校数が多く、京都府は2014年度入試より総合選抜制を廃止する、大阪府は度重なる再編を行うなど、高校の特色化と序列化が進む地域である。対象を京都と大阪に限定した理由として、①単独調査のため同一年度内に日本全国を対象としたデータ収集は困難である、②無作為抽出を行うと地域の特徴が捨象されてしまう、③調査者は京都と大阪の高校教育に関わってきたため、地域事情をふまえた考察ができるという3点があった。通信制高校については、全体の校数が少なく、(例えば入試制度における)地域差が少ないため全国を対象とした。合計で362校の校長挨拶文が調査対象となった。

(2) 手続き

校長挨拶は新年度に加筆・修正されるため、2015年度春に更新された挨拶文を対象としてデータ収集を行った。2015年7月から2016年3月にかけて、各高校のホームページ(以下HP)に掲載された校長挨拶を収集し、設置者・課程・偏差値の情報と合わせてテキストに入力した。同HP上に理事長挨拶も記載されている場合は、校長挨拶と合わせて1つの挨拶文とした。入力時点で、教育目標と関係のない文頭と文末の挨拶(例。「ようこそ、X高校のHPへ!校長のAと申します」「今後も様々な情報を掲載いたします」)は除外した。偏差値は、高校偏差値net(2015)に記載された数値を記入したのち、家庭教師のトライ(2016)で示された数値と照らし合わせた。その際、偏差値は学科ごとに算出されていたため、学校内で最も偏差値の高い学科の偏差値を用いた。類型化に際しては、偏差値65以上を上位、45以上64未満を中位、44以下を下位とした。

それぞれの学校について、課程、設置者、偏差値で類型化したところ、全日制的公立高校数は上位42、中位43、下位45(合計130)、全日制的私立高校数は上位46、中位43、下位29(合計118)、通信

制高校数は公立が25、私立が89であった(表1)。

表1 設置者、課程、偏差値(高校タイプ)別の対象校数

		偏差値			合計
		上位	中位	下位	
全日	公立	42	43	45	130
	私立	46	43	29	118
通信	公立	—	—	25	25
	私立	—	—	89	89
		88	86	188	362

2. 分析

分析には、テキストマイニングソフト「KHコーダー(Ver. 3.Alpha.8)」を用いた(樋口, 2004; 樋口, 2014)。KHコーダーでは、文章を形態素に解析する「茶筌」、データベースを管理する「MySQL」、解析を行う「R」等がパッケージ化されている。

(1) 前処理

形態素とは、「これ以上細かくすると意味がなくなってしまう最小の文字列」を指しており、解析ソフトを用いた場合には自動的に対象となる文章すべてが最小の文字列へ分割される(林田・脇森, 2005, p.31)。そのため、分析に関係のない語を除外し、表現の異なる同義語をまとめることで、分析の精度を上げる必要がある。本研究においても、教育目標とは関係のない語3種類、すなわち①高校タイプを指す語(例. 本校, 学園, 通信), ②年号(例. 昭和), ③様々な語と組み合わせて用いられ、それ自体で意味をくみ取ることが難しい語(図る, 思う, 持つ, 取り組む, 行う, 迎える, の6つ)を「使用しない語」として登録した。また、複合語3種類、すなわち①学校教育用語(例. 生徒指導, 校務分掌), ②文科省が用いる語(例. 生きる力, SSH), ③組み合わせて用いられる用語や四字熟語(例. 自己責任, 質実剛健)は「強制抽出する語」に登録した。さらに、平仮名だけの語を漢字へ置き換え(例. みらい→未来), 同じ意味をもつ単語を統一した(例. 知・徳・体→知徳体)。以上の手続きを経て、4389種類の分析対象語が抽出された(名詞/形容動詞/動詞を対象とした)。語の平均出現回数は8.49回(最小1回,

最大 948 回), 出現回数の標準偏差 30.71, 1 回のみ出現した語が 1795 種類で全体のうち 40.90% だった。

(2) 対応分析

前処理の後, 高校タイプごとの特徴を明らかにするため, 外部変数(高校タイプ)と語で対応分析を行った。対応分析は, クロス集計表を用いて, 行の要素と列の要素の相関が最大になるよう並び替え, 行と列の各要素を空間配置するものである。出力された布置図は, 出現パターンに特徴のない語が原点付近にプロットされ, 原点から見て外部変数(高校タイプ)の方向にプロットされる語, それも原点から離れている語ほど, その外部変数の特徴づける語と解釈することができる(樋口, 2014)。語の選定にあたって, 累積寄与率が 5 割以上(小杉, 2005)かつ視認性の観点から 70 語以下になる条件を探索し, 最終的に出現回数が 90 以上の語を用いた。結果として 60 語が抽出され, その中で差異が顕著な上位 40 語⁴⁾を分析対象とした。成分スコアの累積寄与率は 68.62% (成分 1: 42.89%, 成分 2: 25.73%) であった。

(3) 階層的クラスタ分析

次に, 出現パターンが類似する語の群を特定するために, 対応分析で得られた語と高校タイプの成分スコア(座標値)をもとに階層的クラスタ分析を行った。階層的クラスタ分析は, 「クラスタ間の距離(非類似度)関数に基づき, 最も距離の近いクラスタを逐次的に併合」し, 「この併合を, 全ての対象が一つのクラスタに併合されるまで繰り返すことで階層構造を獲得する」ものである(神寫, 2003, p.60)。KH コーダーでは, 対応分析の結果をもとにクラスタ分析を行う機能は付帯していないため, 成分スコアを csv 形式で保存し, SPSS 23.0 を用いて階層的クラスタ分析を実施した。クラスタの合併方法としては, 分類感度が高く明確なクラスタをつくるウォード法を, サンプル間の距離算出は平方ユークリッド距離を用いた。クラスタ数は, 樹形図におけ

る次のクラスタ合併までの距離が長く, なおかつ 1 クラスタにつき 1 つ以上の高校タイプが所属する最小のクラスタとなることを条件として, 4 つに決定した。

分析中は, 必要に応じて KH コーダー付帯の「KWIC コンコーダンス」を用いた。KWIC コンコーダンスは, 指定した語が出現する文章を一覧として表示し, 当該の語の周辺に, どんな語が, どの位置に, どの程度出現したかを計上するコロケーション機能を持つ。抽出語の同義語をまとめる作業, 対応分析の軸の解釈, クラスタ化に際して, 抽出語が用いられる文脈を繰り返し推測・確認した。以下では, 挨拶文から抽出された語のうち, 最終的に分析に使用された語を括弧 [] で括って表記する。

結果と考察

表 2 に, 分析対象語(出現回数 90 以上)と各語の出現回数を示した。出現回数の多い語は順に [生徒] (948 回), [学習] (740 回), [教育] (738 回), [自

表 2 分析対象語と各語の出現回数

最終的に分析に使用された 40 語				使用されなかった 20 語	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
生徒	948	学力	153	社会	443
学習	740	人材	153	未来	395
教育	738	伝統	135	考える	259
自分	546	卒業	134	豊か	173
人	402	成長	125	目標	164
力	313	進学	124	環境	162
育成	301	精神	124	実現	152
心	257	世界	123	様々	141
大切	251	生活	119	育む	129
地域	246	活躍	118	育てる	118
授業	221	普通	118	入学	116
夢	211	歴史	109	実践	114
人間	202	人生	108	身	113
指導	193	個性	107	生きる	111
時代	190	支援	106	希望	109
国際	188	専門	104	貢献	109
活動	187	文化	99	努力	108
進路	168	充実	95	必要	106
教職員	167	自立	91	挑戦	99
大学	161	基本	90	開校	98

4) KH コーダーは, 対応分析において外部変数(高校タイプ)ごとに差異が顕著な語を自動抽出する機能を有する。本研究は, 高校タイプごとの特徴を探ることを目的としているため, 60 語のうち差異が顕著な 40 語を自動抽出し, 分析に使用した。

分] (546回)であった。対応分析に使用されなかった語を見ると、社会 (443回)、未来 (395回)、考える (259回)、豊か (173回)、目標 (164回)と続いた。使用されなかった語が高校タイプに関係なく用いられる傾向があることをふまえると、各校長は全般的に未来や社会を意識した教育目標を立てていることが伺えた。以下では分析手順に沿って、(1)軸の解釈、(2)布置された語のクラスタ化、(3)クラスタの布置関係について記す。

1. 対応分析における軸の解釈

対応分析の結果 (図1) のうち X 軸 (成分1) に着目したところ、右に向かうにつれ布置された語の修飾語または主語が教師や学校から生徒へ向かう傾向が見いだされた。右端には、[卒業] [夢] [個性] といった生徒を主語・修飾語とする語が、左端には

[伝統] [歴史] [充実] といった学校や教師、教育活動を主語・修飾語とする語が配置されていた。したがって X 軸は、学校教育目標の主語を指すものとみなし、学校・生徒で区分した。高校タイプに着目すると、左側に公立高校が集中し、右側に私立高校と公立通信制高校が布置されていた。以上より、公立は学校を主語とする語を、私立は生徒を主語とする語を用いて教育目標を語る傾向が見いだされた。

続いて Y 軸 (成分2) に着目したところ、上から下に向かうにつれ布置された語がローカルなものからグローバルな性質を帯びていく傾向が見いだされた。上側は、[基本] [学習] [専門] など、学校という特定の場所に結びつく語が頻出しているのに対して、下にいくほど [国際] [時代] [世界] など学校という場から離れた語が用いられている。グローバル (Global) とは、全世界をカバーするあるいは

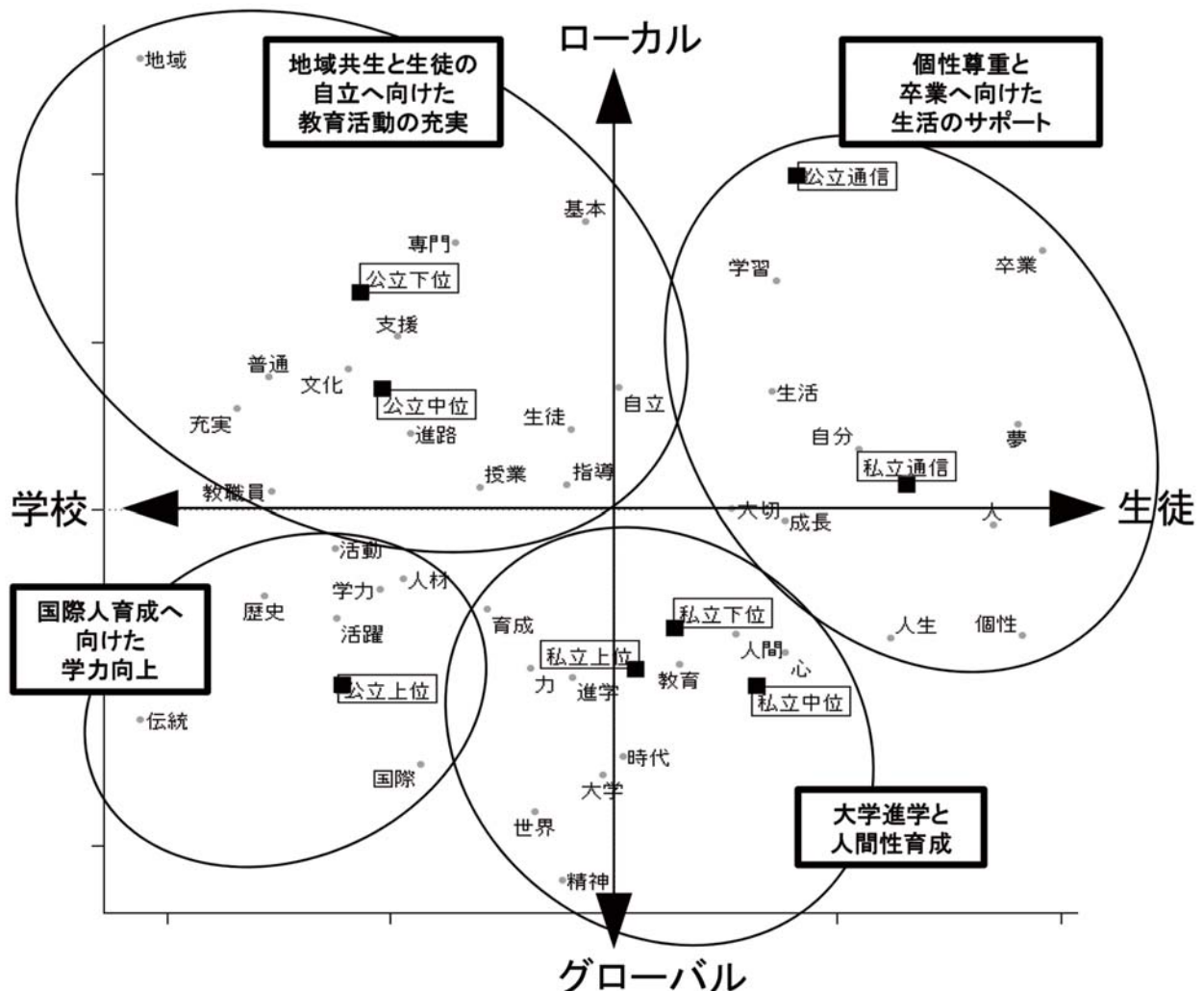


図1 校長挨拶の構造

影響を与えること、一方でローカル（Local）とは、言及している特定の場もしくは暮らしている場に所属する、あるいは繋がっていることを指す（Oxford University Press, 2016）。そこで、語の意味する空間の限定性に着目して、グローバル・ローカルの区分を用いることとした。高校タイプに着目すると、上側から公立通信・下位・中位・私立通信と続き、下側から公立上位・私立中位・上位・下位と続いて布置されていた。

2. クラスタ化

図2に対応分析で得られた各語の成分スコア（座標値）をもとに行ったクラスタ分析の樹形図を、表3にクラスタ化の結果を示した。高校タイプ別の教育目標の特徴は、「国際人育成へ向けた学力向上（クラスタ1）」、「大学進学と人間性育成（クラスタ2）」、「地域共生と生徒の自立へ向けた教育活動の充実（クラスタ3）」、「個性尊重と卒業へ向けた生活のサポート（クラスタ4）」の4つに分けられた。

クラスタ1は、① [学力], [活動], [人材], [活躍], [歴史], ② [国際], [伝統] の2群から構成され、公立上位が該当した。[学力] の前後には、向上が用いられ、元データを参照すると質の高い学力、汎用性のある学力といった語が並んでいた。また、[活

動] の前にはボランティア、自主、生徒会など多様な語が並んでいた。[人材] の前には、[活躍], 貢献が頻出し、さらに活躍、貢献の前に [国際] が用いられた。元データを確認すると、「国際社会のリーダーとして社会貢献できる人材」、「国際化が進む世界で活躍できる人材」の育成が教育目標として掲げられていた。[歴史] と [伝統] はセットで用いられることが多く、元データを参照すると、「創立XX年を迎える歴史と伝統ある学校」など、教育目標というよりも、高校が長い時間存続してきたことを謳う文章の中で用いられていた。以上をふまえ、クラスタ1は国際社会で活躍できる人材の育成を目標として質の高い学力を追求していることを意味すると考え、「国際人育成へ向けた学力向上」と命名した。

クラスタ2は、① [時代], [精神], [世界], [大学], ② [力], [進学], [育成], ③ [心], [教育], [人間] で構成され、私立上位・中位・下位が該当した。このうち、[時代] は、変化、中学、青春、対応、求めるなど、[世界] は、情勢、舞台、文化など、[教育] は、環境、キャリア、実践、システム、内容など、それぞれ多種多様な語と併用されていた。[精神] は、挑戦、進取、自律、自由、利他、キリスト教、仏教など様々な語と、[心] は思いやる、感謝、触れ合いなど他者との関係性を重視する語と接続されてい

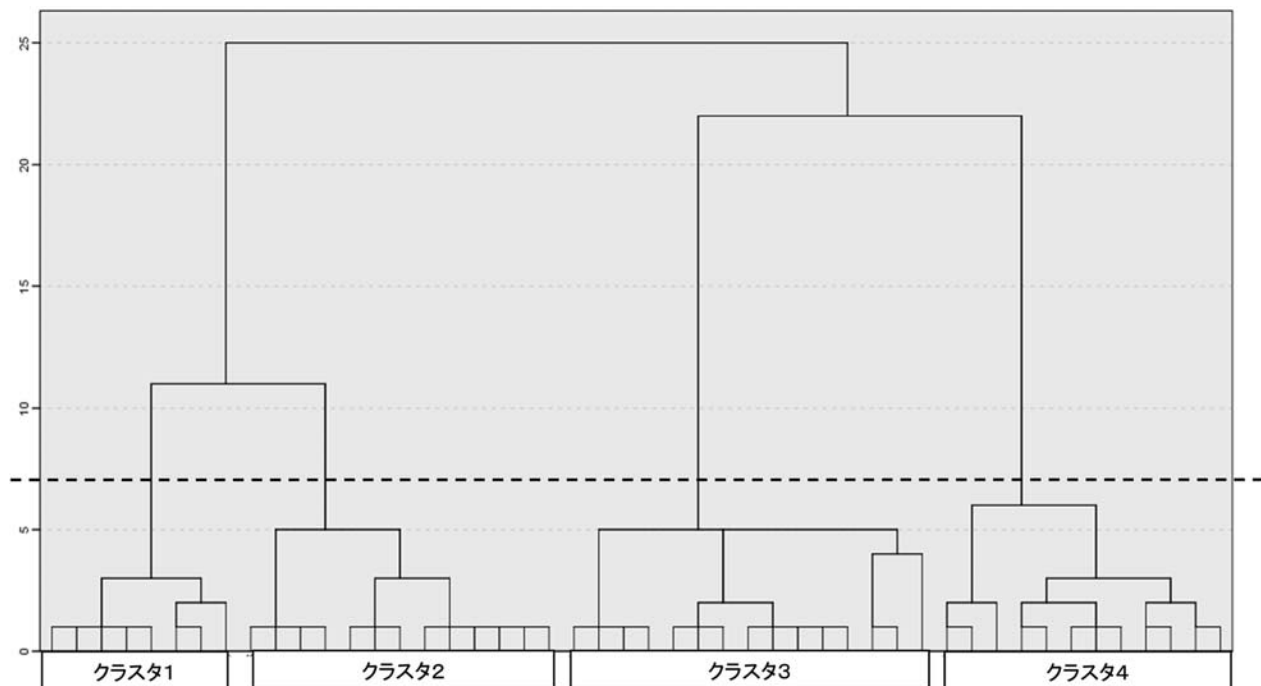


図2 対応分析の成分スコアをもとにした階層的クラスタ分析の樹形図

表3 クラスタ化の結果

クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4
国際人育成へ 向けた 学力向上	大学進学と 人間性育成	地域共生と 生徒の自立へ向けた 教育活動の充実	個性尊重と 卒業へ向けた 生活のサポート
学力 活動 人材 活躍 歴史 国際 伝統	時代 精神 世界 大学 力 進学 育成 心 教育 人間	生徒 自立 指導 授業 普通 充実 教職員 支援 文化 進路 専門 基本 地域	学習 卒業 成長 大切 自分 生活 個性 人生 人 夢
公立上位	私立上位 私立中位 私立下位	公立中位 公立下位	公立通信 私立通信

た。元データを確認すると、「進取の精神をもった人」など、生徒の人間性について言及されていた。続いて「人間」をみると、後に「育成」と形成が並び、前にはバランス、自律、尽くすなど様々な語が並んでいた。ここから、生徒の人間性育成を目指していることが伺えた。一方で、「大学」の前には難関、国公立が、後には合格、「進学」、受験が用いられることが多く、大学進学を重視していることも見受けられた。人間性育成と大学進学との接続関係を知るために元データを参照したところ、「大学進学だけを目標ゴールとするのではなく、利他の心を持った人になってほしい」等、人間性育成を強調するために大学進学が持ち出されるパターンと、大学進学と人間性育成とが別物として扱われるパターンとがあった。以上をふまえ、私立高校では生徒の人間性育成と、大学進学の文脈のどちらか／どちらもが重視されていると考え、「大学進学と人間性育成」と命名した。

クラスタ3は① [生徒], [自立], [指導], [授業], ② [普通], [充実], [教職員], [支援], [文化], [進路], ③ [専門], [基本], [地域] で構成され、公立中位・下位が該当した。[自立] は、社会、向か

うという語と接続され、社会での自立を目指していることが推定できた。[地域] については、貢献、連携、保護、信頼、愛すといった語が後続しており、地域との共生を目指していると考えられた。その他の [指導] や [授業], [支援] や [進路] は、学校教育活動の [基本] を指しており、生徒指導、進路指導、自立支援など、組み合わせで用いられることも多い。元データをみると、卒業後の自立へ向けて、あるいは地域との信頼構築へ向けて種々の教育活動(わかる授業や補習の実施、部活動への注力等)の [充実] を図っているという文章が散見された。[文化], [生徒], [教職員] は、いずれも多種多様な語と用いられ、その後用いられる文脈も様々であった。[普通] と [専門] については、普通科・専門学科として、教育目標ではなく学校紹介の中で用いられていた。以上をふまえ、公立の中下位校では地域との信頼形成と生徒の自立へ向けた教育活動が展開されていると考え、クラスタ3を「地域共生と生徒の自立へ向けた教育活動の充実」とした。

クラスタ4は① [学習], [卒業], ② [成長], [大切], [自分], [生活], ③ [個性], [人生], [人], [夢] で構成され、公私の通信制高校が該当した。[卒業]

という語の後に資格という語が、さらに後に進路と取得という語が並んでいた。元データをみたところ、同級生と同年に卒業が可能であることや高校卒業資格は全日制と同等であることをアピールする文章が多数みられた。[自分]には、未来、考える、ペース、[人生]が続いていた。また、[個性]には伸ばす、[大切]、尊重が接続されていた。元データをみると、「自分の人生に夢をもつ人」「一人一人の個性や特性に応じた教育」等の目標を掲げる高校も少なくなかった。[成長]は、促す、支える、サポートといった語と接続され、元データを参照すると「生徒の成長を支える」という表現が多用されていた。[生活]は、習慣、スタイル、日常、確立、始めるという語と接続され、元データをみると「基本的生活習慣の確立」や「新しい生活スタイルで」といった文言が並んでいた。これら3つの文脈（卒業、個性教育、生活習慣や生活スタイル）の接続関係について、元データを参照すると、個々人の夢実現や卒業のために、生活習慣を重視すること（もしくは生活スタイルを選択できる環境を用意していること）を記す学校が散見された。以上より、公私の通信制高校では生徒の卒業そのものへ意味を付与するとともに、個性に応じた教育を目指していると考えられ、「個性尊重と卒業へ向けた生活のサポート」と命名した。

総合考察

本研究の目的は、高校タイプごとの教育目標の特徴を捉えることを通じて、社会的要請（多様化への対応と質保証）が学校でどのように展開されているのかを捉えることであった。設置者、課程区分、偏差値の異なる高校362校を対象として、各高校のホームページに掲載された校長挨拶文との対応分析を行った。その結果、語の主語・修飾語（生徒－学校）と語の意味する空間的限定性（ローカル－グローバル）という2成分が得られた。次に、対応分析で得た各語と高校タイプの成分スコアをもとに階層的クラスタ分析を行った結果、「国際人育成へ向けた学力向上」「大学進学と人間性育成」「地域共生と生徒の自立へ向けた教育活動の充実」「個性尊重と卒業へ向けた生活のサポート」が得られ、それぞれに公

立上位、私立全般、公立中下位、公私通信の高校タイプが該当した。

1. 校長挨拶文の類型－学校教育目標の背景にある文脈

課程、設置者、偏差値の異なる8つの高校タイプは、校長挨拶文との対応分析によって4つのクラスタにまとまった。同じクラスタにまとまった高校タイプは、（他の高校タイプに比べて）類似する教育像を描いていると言える。以下では、校長挨拶文の類型について、それぞれどのような文脈が背景に横たわっているのか、考察を試みる。

通信制高校は、設置者（公立・私立）にかかわらず、卒業や生活のサポートといった基本的事柄を重視した方針を設定する傾向にあった。通信制高校は、前籍校で躓いた生徒の「再挑戦の教育機関」と言われている（文部科学省、2016b）。また、教育面だけでなく医療福祉面のニーズをもった子どもたちを、通常教育条件のなかで受け止めているとの指摘もあり（谷田、2002）、生徒が生活のサポートを必要としていることは想像に難くない。現代の学校教育における「個性」教育は、選択科目の増設によって具現化されることをふまえると（例えば、安彦（2015）を参照）、生徒に対して選択肢を複数提示することを「個に応じた」「個性を発揮する」と表現していることが推察できる。文部科学省も、通信制高校では一人ひとりに沿った学習方法、学びたいときに学べる環境・施設を整備することを推進しており（文部科学省、2016b）、選択肢の充実を通じて基本的事柄の達成を果たそうとしていると考えられる。

公立の中位・下位校は、地域を重視した方針を設定する傾向にあった。高校は、地域の学校として発展することが目指されてきた一方で、競争・選抜の原理と生徒の問題行動や「荒れ」の頻発とが相まって、「地域のなかでの陸の孤島（p.17）」と呼ばれる状況も生まれた（太田、2004）。中央教育審議会の教育課程部会・高等学校部会においては、高校においてグローバルな課題だけでなく、地域社会の形成や地域の課題をどう考えるのかが極めて重要だとする意見が示されている（中央教育審議会、2016）。こうした地域との共生は、公立の中下位校で精力的

に進められている可能性がある⁵⁾。ただし、地域との共生（および生徒の自立）へ向けた具体的方法としては、「学内の」基本的教育活動の充実が位置づけられていた。例えば、学校教育活動において基本となるような「指導」や「授業」、[支援]や「進路」といった語が並び、それらの「充実」（例えばわかる授業や補習の実施、部活動への注力）が共通する方法として析出された。無論、地域共生の方法論を構築している高校もあると考えられるが、共通して語られる内容は学内活動の充実にとどまっており、地域共生へ向けた方法論が確立しているとは言いがたい状況が推察された。

全日制の私立全般は、大学進学と人間性育成を重視した方針を設定していた。大学進学については、公立・私立に関係なく進学コースの設置やカリキュラム編成による受験指導が行われてきたが、近年は特に難関大学への進学を重点的に指導する私立高校が増えているという（ベネッセ教育情報サイト、2016）。また、もう1つの私立高校の教育目標の特徴として、人間性の育成があった。私立高校はそれぞれ、時代をこえて受け継がれる建学の精神を有しており、建学の精神は「どのような」人間を育てるかについて言及していることが多い。こうした私立特有の建学の精神が共通項として出現したと考えられる。

さらに、公立上位校では国際人の育成という方針が示されていた。当方針については、スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）およびスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）による指定の影響が推察される。SGH指定校は「目指すべきグローバル人物像を設定」して探究的学習に取り組むものとされ（Super Global High School, 2017）、SSHは、将来「国際的に活躍し得る科学技術人材の育成」を目指して理数系教育の研究開発を行うものとされている（科学技術振興機構、2016）。どちらも、生徒の国際的な活躍を支援する事業であると言える。本

研究が分析対象とした地域（京都・大阪）における指定校は、公立中下位校2校、私立が9校だったのに対して、公立上位校が22校（SGH7校・SSH15校）を占めていた。公立上位校では「国際的な場で活躍するための学力」という、1990年代より社会的次元・マクロレベルの目標とされてきた新たな学習観が浸透している可能性がある。

ただし、公立全日制高校が偏差値上位と中下位とで分かれたのは、京都と大阪の地域特性が影響していると考えられる。京都では、1985年以降、徐々に総合選抜制の廃止と通学区域の拡大が進められ、高校が序列化していった。1990年代後半には嵯峨野、堀川、西京高校といった一部の公立高校で学校改革が行われ、進学率の突出した学校群が形成された。大阪においても、1999年より10年の歳月をかけながら高校の特色づくりと再編が行われてきた（大阪府、2016）。2011年には進学指導特色校の指定が始まり、一部の公立高校がエリート校と化し、難関大学への進学率が上昇した（産経WEST, 2014）。京都と大阪は、公立高校の一部が突出した進学校と化していった経緯がある。こうした地域事情も、校長挨拶文に影響を及ぼしていると考えられる⁶⁾。

2. 校長挨拶文の構造—高校における多様化と質保証への対応

高校教育は、1990年代以降、多様化した生徒のニーズに応じるべく特色化・個性化・多様化を進め、2000年代以降は学力低下論をきっかけに（主に学力の）質保証が重視されるようになった。こうした2つの社会的要請に対して、高校はどのように応えようとしていたのであるだろうか。端的にまとめるならば、2つの社会的要請は高校タイプ間で分業されていることが看取された。公立上位校は質の高い学力（質保証という社会的要請）を、通信制高校は個性や卒業（教育の多様化という社会的要請）を重視し、そ

5) こうした実態をふまえ、日本高校教職員組合・高校教育研究委員会（2004）では、地域に開かれた高校づくりを推進するための基礎や実践について論じている。同著書を執筆した高校教諭全13名のうち12名が公立中位～下位校の教諭であることから、公立の中下位校において地域との接続や融合へ向けた取組みが行われていることが推察できる。

6) もちろん、両府は一部の公立高校のみに注力しているのではなく、高校全体の特色化を進めている。例えば京都府では、SSHやSGHと類似する方向での特色化（スーパーサイエンスネットワーク京都、グローバルネットワーク京都）に加え、社会の変化に応じる職業人育成を目指す方向（スペシャリストネットワーク京都）、学校の特色に応じた探究活動や地域学習に取り組む方向での特色化（京都フロンティア校）が推進されている（京都府、2017）。

して両者の間に位置する高校タイプは、2つの社会的文脈に対して地域共生・自立（公立中下位）、人間性育成と大学進学（私立全般）という形で応じようとしている可能性が示唆された。ある意味では矛盾をも含むような2つの社会的要請に対して、1つの高校タイプで両方に応じるというよりも、高校全体での分業が生じていたと考えられる。

改めて高校タイプに着目すると、特別なニーズをもつ生徒が在籍する高校（一般に教育困難校と呼ばれる高校）ほど右上に布置されることが読み取れる。そして、左下から右上に向かうにつれ、挨拶文はグローバルな語からローカルな語へ、学校を主体とした語から生徒を主体とした語へ変容していた。つまり、生徒の多様なニーズは大別して4つの方向性へと分配され、特別なニーズを有する子どもほど「生徒」を主語として「ローカル」な方針をもつ学校に配分される可能性が示唆された。

本研究では学校評価に関するデータは扱っていないため、各種高校が実際にどのように質保証を実現しようとしているのかは分からない。とは言え、学校評価では、各学校が目指す生徒の人間像や学校の状況をふまえた目標設定が求められる。実際にそうした手順ですすめられているとすれば、校長挨拶文は質保証の一端を表しているとも言えよう。本研究で見出した校長挨拶文の4類型は、高校教育が少なくとも4方向（卒業と個性尊重、地域共生と自立、大学進学と人間性育成、国際人育成）へ向かっていることを示唆する。

今後は、2つの社会的要請に対して、高校タイプ間での分業が生じているのか、多角的なデータを用いて検証する作業が求められる。そして、実際に分業化が進んでいるとすれば、各々の高校タイプにおいて目標の実現を支える方法（例えば公立中下位校における地域共生）と、高校タイプを横断した目標の探究（例えば学力に関する言及が乏しい通信制高校での学力保障）について、検討を重ねる必要があると考えられる。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では①データの収集範囲、②対象としたデータの質、③分析対象とした語の3側面において、

限界を有する。まず、①データの収集範囲として、定時制を全日制と分けて扱うことができなかった。定時制は戦後より勤労青年の学習を支えてきた場であり、全日制に還元されえない独自の教育目標を構築してきた歴史をもつため、今後は定時制の教育目標も含めたデータを収集する必要がある。加えて、本研究が対象とした全日制高校の校長挨拶文も、京都と大阪の二府に限定されているため、日本全国の状態を反映しているとは言えない。高校教育は地域単位で展開してきた歴史をもっており、地域によって高校間での分業のあり方も異なることが予想される（例えば香川・児玉・相澤, 2014 を参照）。今後は、様々な地域からデータを収集していく必要がある。

また、②対象としたデータの質の問題として、本研究が示し得たのは、一定回数以上用いられた語句の出現パターンにすぎない。そのため、個々の学校が構想している特色ある取組みを丁寧に捉えることができなかった。学校評価の導入は、教師の自律性が尊重されていた学校組織から、目標による管理と統制が作用する組織へと転換を促しうるため（篠原, 2016）、個々の教師の教育実践のあり方に変化が生じている可能性がある。加えて、公立高校の特色化は、都道府県と市町村それぞれの教育委員会の関係性、各教育委員会の取組み、そして人事異動による影響が小さくはないと考えられる。今後は、組織内部での目標のずれや調整といった力動関係、教育委員会と高校の関係も視野に入れた上で、高校教育の質保証と多様なニーズへの対応について検討したい。

最後に、③対応分析の対象とした語についても、本研究では各校が共通して用いる語（対応分析で原点付近に布置される語）を扱うことができなかった。これらの語のうち「生きる」「豊か」は「生きる力（確かな学力・豊かな心・健やかな体）」で用いられる語と一致しており、生きる力に言及する高校も少なくないことが考えられる。言い換えると、高校の教育目標は、「生きる力」を核としながら4つの方向性へと展開されている可能性がある。今回は、前処理段階における解釈を最小限に留めたが、今後は、各高校がそれぞれの状況に応じて「生きる力」を言い換えている可能性もふまえた上で、分析すること

が課題である。

引用文献

- 安彦忠彦 (2015). 2. 高大接続の視点から (第7章 3つの観点からの考察～成果シンポジウムにおけるコメントとトリプライ) 溝上慎一 (責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾 (編) どんな高校生が大学, 社会で成長するのか 学事出版
- ベネッセ教育情報サイト (2016). 高校受験対策 基礎知識ベネッセ Retrieved from <http://benesse.jp/juken/201509/20150930-1.html> (2016年10月28日)
- 中央教育審議会 (1991). 新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について (答申) (平成3年4月19日)
- 中央教育審議会 (2016). 教育課程部会 高等学校部会 (第5回) 配付資料 文部科学省. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/075/siryō/1373892.htm (2016年10月31日)
- 藤井美和 (2005) テキストマイニングと質的研究 藤井美和・小杉幸司・李政元 (編) 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門 (pp.13-28) 中央法規
- 波多野諠余夫 (1980). 自己学習能力を育てる——学校の新しい役割 東京大学出版会
- 林田英雄・脇森浩志 (2005). テキストマイニング技術とその応用. UNISYS TECHNOLOGY REVIEW, 84, 29-44.
- 樋田大二郎・苅谷剛彦・堀健志・大多和直樹 (2014). 現代高校生の学習と進路——高校の「常識」はどう変わってきたか? 学事出版
- 樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析——2つのアプローチの峻別と統合 理論と方法, 19, 101-115.
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 市川伸一 (1995). 現代心理学入門3 学習と教育の心理学 岩波書店
- 科学技術振興機構 (2016). スーパーサイエンスハイスクール. Retrieved from <https://ssh.jst.go.jp/ssh/public/about.html> (2016年10月14日)
- 香川めい・児玉英靖・相澤真一 (2014). <高卒当然社会>の戦後史——誰でも高校に通える社会は維持できるのか 新曜社
- 神寫敏弘 (2003). データマイニング分野のクラスタリング手法 (1) ——クラスタリングを使ってみよう 人工知能学会誌, 18, 59-65.
- 家庭教師のトライ (2016). 高校偏差値一覧. Retrieved from <http://www.trygroup.co.jp/exam/high/list/> (2016年10月28日)
- 京都府 (2017) 府立高校特色化推進プラン～魅力あふれる47の特色～ Retrieved from http://www.kyoto-be.ne.jp/koukyou/cms/?page_id=394 (2017年3月7日)
- 小杉幸司 (2005). テキストマイニングのカラクリ②——クロス集計表と数量化Ⅲ類 藤井美和・小杉幸司・李政元 (編) 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門 (pp.59-73) 中央法規
- 高校偏差値.net (2015) 高校偏差値ランキング 2016. Retrieved from <http://xn--swqwd788bm2jy17d.net/>
- 松下佳代 (2012). 学校は、なぜこんなにも評価まみれなのか——教育のグローバル化とPISAの果たした役割 グループ・ディダクティカ (編) 教師になること, 教師であり続けること——困難の中の希望 (pp.23-45) 勁草書房
- 文部科学省 (2016a). 高等学校教育改革の推進 定時制・通信制課程について Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/seido/04033103.htm (2016年9月20日)
- 文部科学省 (2016b). 財団法人 全国高等学校定時制通信制教育振興会報告書概要 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/seido/1321632.htm (2016年10月28日).
- 日本高校教職員組合高校教育研究委員会 (2004). 高校教育改革に挑む ふきのとう書房
- 小島弘道 (1985). 学校教育目標 牧昌見・池沢正夫 (編) 学校用語辞典 (pp.150-152) ぎょうせい
- 大阪府 (2016) 高校改革に関すること Retrieved from <http://www.pref.osaka.lg.jp/kotogakko/koukoukaikaku/> (2017年3月8日)
- 太田政男 (2004). 高校教育改革と地域 日本高校教職員組合高校教育研究委員会 (編) 高校教育改革に挑む (pp.11-21) ふきのとう書房
- 大多和直樹 (2014). 高校生文化の社会学——生徒と学校の関係性はどうか変容したか 有信堂
- Oxford University Press (2016) "Global" "Local" Oxford English dictionary. Oxford University Press, Retrieved from <http://dictionary.oed.com/> (2016年12月31日)
- 酒井 朗・林 明子 (2012). 後期近代における高校中退問題の実相と課題——「学校に行かない子ども」問題としての分析 大妻女子大学家政系研究紀要, 48, 67-78
- 坂野慎二 (2009) 高校教育政策と質保証 国立教育政策研究所紀要, 138, 65-74
- 産経 WEST (2014). 難関大への進学2割増 北野など大阪府立の重点10高校 府教委「役割果たした」 Retrieved from <http://www.sankei.com/west/news/140908/wst1409080053-n1.html> (2017年3月8日)
- 志水宏吉 (2012). 検証 大阪の教育改革——いま、何が起きているのか 岩波書店
- 篠原岳司 (2016). 新しい学校と教師の学習 末松裕基 (編) 現代の学校を読み解く——学校の現在地と教育の未来 (pp.81-112) 春風社
- 代田昭久 (2014). 校長という仕事 講談社

Super Global High School. (2017). スーパーグローバルハイスクール Retrieved from <http://www.sghc.jp/> (2017年3月10日)

谷田悦男 (2002). 高等学校に在籍する特別な教育的ニーズをもつ生徒たち 特別なニーズ教育とインテグレーション学会 (編) 特別なニーズと教育改革 かもがわ出版

戸田浩史 (2009). 「ゆとり教育」見直しと学習指導要領の在り方 立法と調査, 295, 65-74

碓井岑夫 (2004). 学校の教育目標 日本教育方法学会 (編) 現代教育方法事典 (p.289) 図書文化社

(2017. 11. 27 受稿) (2017. 6. 21 受理)

(ホームページ掲載 2017年7月)